

シンポジウム

学びの連続体へのまなざし ～生成系AIへの耐性 ・代替不可能性を求めて～

報告者

今村 正治 氏	佐賀女子短期大学 学長
上田 紀行 氏	東京工業大学 副学長
堀江 未来 氏	立命館大学 グローバル教養学部 教授 / 立命館小学校 校長

コーディネーター

山口 洋典 氏	立命館大学 共通教育推進機構 教授
---------	-------------------

〈シンポジウム〉

学びの連続体へのまなざし ～生成系 AI への耐性・代替不可能性を求めて～

コーディネーター

立命館大学 共通教育推進機構 教授 山口 洋典

○本分科会のねらい

コロナ禍が一定の収束へと向かう中、2023年度当初に ChatGPT を代表とする高度な生成 AI が多方面で話題となった。否定的な見解も見られつつも、アクティブ・ラーニングの幅広い展開や、コロナ禍でのオンライン授業の導入と相まって、多彩な実践や挑戦が重ねられている。

そこで本シンポジウムでは学びの場（大学と地域）、学校の種別（初等・中等・高等教育、短期大学と大学、学部・修士・博士、など）、それぞれの連続性をいかに担保して学習環境をデザインできるかに迫ることとした。立命館小学校の事例から小中高一貫教育の現状と展望、佐賀女子短期大学の事例から、小規模地方女子短期大学の意義と可能性、東京工業大学の事例から博士課程までを射程としたリベラルアーツ改革の志、これらの紹介を通じて、第 29 回 FD フォーラムのテーマ「DX・AI 時代の高等教育のゆくえ」に伝えることをねらった。

○報告の概要

堀江未来・立命館大学グローバル教養学部教授からは、児童と教職員と保護者の連携・協力により「経験を通して、主体性と自己肯定感をもち、協働を通して他者と関わりながら学ぶ」姿勢の習得を目指している立命館小学校長という立場とあわせて、「急速に変わる学習者像」と題して報告がなされた。自己紹介では自身の留学時の経験なども紹介しつつ、異文化体験から学び成長する場への関心の背景に触れられた。そして、OECD Learning Compass 2030 で示されたコンピテンシーの構成や学習指導要領改訂による「生きる力」の重視および中央教育審議会による「令和の日本型学校教育」の構築に関する答申など、政策動向を確認した後、立命館小学校での協働教育、ICT、体験型の学び、探究学習、グローバル・マインド、多様性理解など、多彩な展開を写真も交えて紹介された。最後は「無意識のうちにご自分の教育経験や成功体験を基準にしていますか？」と投げかけられ、誰でも、どこでも学習者を中心にした学びの場づくりは可能だと締めくくられた。

今村正治・佐賀女子短期大学学長からは、立命館大学の職員を定年退職した後に北海道の札幌新陽高等学校や佐賀の東明館中学校・高等学校や京都橋大学のコンサルティングやコーチングをはじめ兵庫県立大学の外部評価などに取り組む中で「短大改革と 4 大開学構想」に携わることになった経過を「ジタバタする・無遠慮に巻き込む 小規模／地方／女子／短期／大学の逆襲?!」と題して報告された。まず前提として、人口減少の時代だから大学の淘汰は当前とされ、定員未充足の大学は経営努力不足とされる上にボーダーフリーとなった大学には税金を投入すべきでないという風潮があること、さらには男女共学・4 年制大学こそが大学で女子大や短期大学は歴史的使命を終えたと断じられていることに触れられた。その上で、大学進学率における都市と地方、および性別による格差、大学少数県における県外進学率の顕著さなど、数字で実態を紹介しつつ、もちろん個々の大学の新しい水準での努力が求められるとしつつも、共愛学園前橋国際大学の森昭生学長が提言するように地方自治体と地方大学の連携のもと社会全体で、地方における大学の価値を見つめ直す好機ではないか、と問題提起を行った。その上で、2023 年 2 月発表の「武雄アジア大学」構想にも触れながら、佐賀女子短期大学の改革についても、資格や技能だけでなく大学らしい学びを通じて学び直しやリスキリングが自然にでき、生き方が身につくように、積極的な客員教員の招聘により「外からの風を吹かせる」ようにしたこと、教育福祉資格系の学科では差別化が図られないため「留学のサジョタン・留学生のサジョタン」を目指していること、さらには女子大の名前で男子学生の受け入れを始めること、そして多様な改革に取り組んでいる大学どうしでお互いに讃えあうことが重要と述べられた。

報告の最後は東京工業大学のリベラルアーツ改革を牽引してきた上田紀行副学長から、事前配布資料でもパンフレットが提供された「立志プロジェクト」の事例を中心に、DX・AI の時代に「もう一回人間であること、人間の魅力とは何なのか」という問いに対して自分の言葉を持つことが重要であることについて語られた。そもそもリベラルアーツ改革に取り組むことになったのは、「イマジネーションがなくなって

いき、学生が自分の言葉でしゃべれなくなっていった」ことが大学全体としての課題に取り上げられたため、という。特に東京工業大学は再現可能性と実証性を鍵とする自然科学という学問が中心のために誰が何をどう言ったかには関心が向かない上に、学生の気質として他の人から良い評価を得ることを目指しつつ実際に満たしてきた人たちという極めて狭い価値基準の中での勝ち組であることから、その価値基準を疑ってもらうためにも「言葉が自分の中から生み出されている感覚」が養われるように対話を重視したカリキュラムを全学で導入したという。そうした改革の下支えになっている考えとして、既に150ほどの大学で入試問題に取り上げられている『生きる意味』（2005年、岩波新書）から、自分も他人も「交換可能」な人材ではなく、しかしその対義語を「交換不可能」と位置づけず、「かけがえのない存在」として互いに尊重しあうことが重要ではないか、と説明がなされた。最後は『立て直す力』（2019年、中公新書ラクレ）の第5章から、仏教哲学者の鈴木大拙の言葉「松は松として、竹は竹として」を引用し、他者との比較の中で自分を卑下することなく、もちろん他者を卑下することもなく、既成概念や価値に囚われることなく、自由に生きる技を磨くことが改めてこれからの高等教育に求められるのではないかと示された。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

以上、多岐にわたる観点からの報告の後、まずは報告順で短いコメントを一巡し、休憩とした。その間、オンライン参加者からはZoomウェビナーのQ&Aから質問が寄せられた。

全体討議では対面参加者も含めて、コーディネーターによる進行のもと、可能な限りのコメントや質問に応答することとした。コメントでは「AIを使いこなせるよう人間も進化が必要」などが寄せられ、質問では学習態度の評価については「学習者自身の振り返りを含め、学びを記録していく」（堀江先生）、新しい学びを、（地方で）大人が創造性をもってつくっていくには「母語以外の言語でのコミュニケーション機会を無茶振りする」（今村先生）、AIでは代替不可能な自己探究に必要なものは「データやスペックなど客観的指標では語り得ないもの追究する」（上田先生）といった具合に当意即妙なやりとりが続き、白熱の2時間となった。

スライド1

急速に変わる学習者像
— 小中高一貫教育から見えるもの —


立命館大学グローバル教養学部教授 / 立命館小学校校長 堀江未来

2024年2月23日
学びの連続性へのまなざし～生成系AIへの期待・代替不可能性を求めて～

スライド2

自己紹介：堀江未来（ほりえみき）

- 名古屋大学教育学部・教育学研究科修士課程（比較教育学）
 - 留学生支援団体の立ち上げ
 - 交換留学生として中国・南京大学で1年過ごす
 - 外務省日韓交流プログラムで韓国で1ヶ月過ごす
- ミネソタ大学大学院教育政策行政専攻 博士課程
 - 「異文化体験から学び、成長するとは？」
- 南山大学・名古屋大学を経て 2009年立命館大学へ
 - 大学の国際化推進・異文化間教育
- 2017～2020 立命館小学校・中学校・高等学校 代表校長
- 現在：
 - 立命館小学校校長
 - 立命館大学グローバル教養学部教授



スライド3


立命館小学校の目指すもの：（一旦）完成した基本理念図

自立した学習者
基礎学力と探究的学び
挑戦・失敗体験
個別最適・自由進度
探究 など

「経験を通して、主体性を自己肯定感をもち、対話や協働を通して他者と関わりながら学ぶ子（人）」

児童・教職員・保護者が共にお互いの成長を応援し合える場に

これからの学校づくり・カリキュラムづくりの指針に



スライド4

2030年の社会とその捉え方


VUCAの時代、
とはいけれど・・・

変化に対応する人
&
変化を作り出す人

- 高齢化・貧富の差の拡大
- 政治経済の中心はアジアへ
- エネルギー消費の拡大・枯渇する資源管理の危機
- 急速なデジタル化・次元の違う技術革新
- 国家間依存関係の強化・グローバル化の弱点が露呈・予測不能な世界秩序

未来予測 50% 理想像 50%

「未来学」の考え方



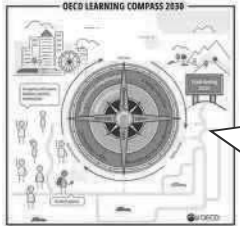
スライド5

初等・中等教育の動向(1)
OECD Learning Compass 2030

OECD LEARNING COMPASS 2030

- 個人と社会のWell-being
- 変容をもたらすコンピテンシー
 - 「新しい価値を創造する」
 - 「緊張とジレンマへの対応」
 - 「責任ある行動」
- 知識・姿勢・スキル・価値観
- 体験学習サイクル
 - Anticipation-Action-Reflection
- 学習者のエージェンシー／学習者・教師・保護者・コミュニティ間の主体的な変革に向けての相互作用

https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_Learning_Compass_2030_concept_note.pdf



スライド6

初等・中等教育の動向(2)
学習指導要領「生きる力」
(平成29・30・31年改訂)

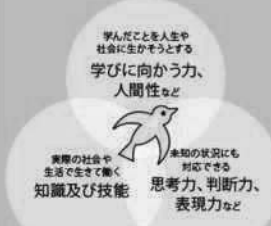
「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点から『何を学ぶか』だけでなく、『どのように学ぶか』も重視して授業を改善します。」

「学んだことを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力、人間性など」

「未知の状況にも対応できる
思考力、判断力、表現力など」

「実践の社会や生活で生きて働く
知識及び技能」

社会に出てからも学校で学んだことを生かせるよう、
三つの力をバランスよく育みます。



スライド7

初等・中等教育の動向(3)
中教審答申より

「令和の日本型学校教育において、児童生徒の個別最適な学びの実現に向けて、児童生徒のよき点や可能性を伸ばし、これまで以上に児童生徒の成長やつまづき、悩み等の理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく支援することが大切であると指摘されている。」

中央教育審議会(令和3年)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)

スライド8

学習者としての
立命館小学校
児童の姿
(1)
協働学習
ICT



スライド9

学習者としての
立命館小学校
児童の姿
(2)

体験型の学び
探究学習
プレゼン



スライド10

学習者としての
立命館小学校
児童の姿
(3)

グローバル・
マインド
多様性理解



スライド11

最後に

- 新しい学習者が育っているのは立命館小学校だけの話ではありません。
 - 「GIGAスクール構想」
 - 「せかいXまなびのプラン」
- (無意識のうちに)自分の教育(成功)体験を基準に考えていませんか?
 - 「私たちが育てている学生は、私たちが経験したことのない世の中を生きていく存在だということを忘れないように」(Dr. Josef Mestenhauer)

スライド1

ジタバタする・無遠慮に巻き込む 小規模/地方/女子/短期/大学の 逆襲?!

学びの連続体へのまなざし
～生成系AIへの耐性・代替可能性を求めて～
大学コンソーシアム京都 シンポジウム
佐賀女子短期大学 学長 今村 正治

スライド2

自己紹介

1981年入職 学校法人立命館職員 2019年退職

教育現場「学校」と関わり続ける
札幌新陽高校 東明館中高 京都橋大学 兵庫県立大学

佐賀女子短期大学との出会い 2021年5月

学長就任2022年4月

短大改革と
4大開学構想

武雄アジア大学（仮称）構想 2023年2月発表



スライド3

小規模/地方/女子/短期/大学 絶望か希望か

- ・人口減少の時代に、大学の淘汰は当たり前
- ・定員未充足の大学＝経営努力不足、偏差値ボーダーフリーに
- ・税金を投入すべきでない!
- ・男女共学・4年制大学こそが大学で、女子大、短期大学は
- ・歴史的使命を終えた・・・
- ・ほんとにそうなのか?

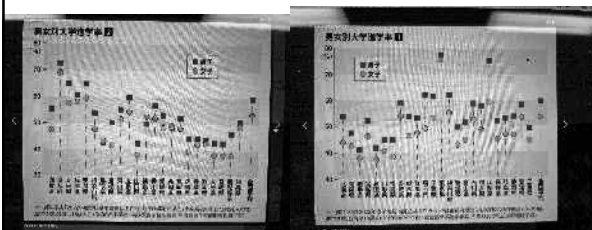
スライド4

小規模/地方/女子/短期/大学 絶望か希望か

- ・全国私立大学 定員未充足大学 53.3% (短期大学90%)
- ・→ 個々の大学だけに問題を矮小化していないか?
- ・大学進学率 90年代20% 2000年代40% 2023年度57.7%
- ・→ 激変する時代の中で、大学の価値は向上している?
- ・→ 学生は能動的に学んでいる?
- ・3大都市圏除く地方小規模大学89% (私大の77%)
- ・→ 定員未充足大学 小規模/地方大学に多い

スライド5

都市と地方と性別の格差・・・大学進学



県内進学21.0% 県外進学80.0% (福岡39.4 東京7.8 長崎5.6 熊本4.6) 令和元年
同規模県 山梨県 大学12・大学進学率56.6% : 佐賀県 大学5・40%

スライド6

佐賀県

人口 約83万人
面積 約2441km²

4年制大学 2
短期大学 3
進学率 44%

山梨県

人口 約80万人
面積 約4465km²

4年制大学 9
短期大学 3
進学率 57%

大学進学者の80%が県外へ

スライド7

小規模/地方/女子/短期/大学 絶望か希望か

- ・大森昭生学長（共愛学園前橋国際大学）の提言
- ・リスキリング、パートタイム学生を「学生」と位置付ける
- ・私学助成 全大学に一律+規模に比例して配分・2段階方式
- ・私学助成 地域（人口極小とか）、地域貢献を精査する仕組み
- ・地方自治体と地方大学の連携 地方交付税を大学に
- ・社会全体で大学の価値を見つめ直す
- ・厳しい労働条件・環境で、地方の人材育成のため、よくがんばってるねと励ましてね、ほめてね、と言いたい！！
- ・他方、もちろん、大学にも新しい水準での努力が求められる

スライド8



スライド9



スライド10

地方に学び、世界に学び、地域社会をデザインする 短大は時代の新しい選択！

- ・技能・資格が身につく！
 - 社会の即戦力に →生きていく基礎をつくる（戻る場所）
- ・2年間の大学らしい学び、様々な人との出会い
- ・卒業・3年目の選択肢が広がる！
- ・資格・技能+大学らしい学び で広がる
 - 就職、4大進学、留学などなど
- ・人生の大きな変化に直面したときに、乗り越えるチカラ
- ・→学び直し、リスキリングが自然にできる生き方

スライド11

女子教育のスピリットは 継承していく
魂を持つ必要のあるすべての人々にも・・・

女子は、魂をもっと磨き「武装」しよう

「世の中の大部分は、女の場所ではなくて、女を否定する場所だということ、そして女は、女の場所とは何であるかをつかむ必要があるということ - そこに引きこもって庇護されるのではなくて、力を与えられ、みずからの価値と全体性に確信をもって、そこから前進していけるような場所として。わたしはそのとき、それが意味しているのは美しい 寄宿舎ホールや庭園があることではなくて、魂をもつことなのだ」と惜りました。」

(アドリエンス・リッチ、大島かおり訳『血、パン、詩。』晶文社、1989年)

スライド12

ジタバタする・無遠慮に巻き込む 佐賀女子短期大学の場合

- ・外からの風を吹かせる
- ・無遠慮の魂 専門家にどンドン頼る
- ・地方短期大学の再定義 役割と価値を更新する
- ・教育福祉資格系の学科はどこでも同じに見えるから・・・
- ・留学のサジョタン 留学生のサジョタン
- ・AI活用 語学授業改革
- ・新入生教育 マインドフルネス プレインワークアウト
- ・目立つインターンシップ
- ・女子大の名前で、男子学生の受け入れ

スライド13



スライド14



スライド15



スライド16

